

## 「南洲翁遺訓」について

### 第八話

第十一条 帝国主義批判と植民地主義批判

第十七条 国家の危機を己のものとして引き受ける気概

西郷は謹慎した慶喜（慶喜）に新政府軍となる薩摩藩に戦う意志を促すよう浪人 150 人を集め、江戸の町に放火や狼籍を起させた。それを取り締まったのが庄内藩であり、過度な狼籍に怒り薩摩藩の江戸屋敷に対し焼き討ちを行った。その隊長が鬼玄蕃（げんば）と呼ばれた若き「酒井玄蕃」であった。

やがて新政府が仕掛けた戊辰（ぼしん）の役に庄内藩は藩主「酒井忠篤（さかいただすみ）」以下、家臣達は熱烈な佐幕派で、徳川の為に最後まで忠節を尽くし奮戦した。しかし東北地方の諸藩で作られた奥羽越（おうえつ）列藩同盟の諸藩が次々と投降するにあたり、最後まで戦った「庄内藩」も、ついに明治元年（1868 年）九月、恭順を示し軍門に下った。この時玄蕃（げんば）は精鋭二番大隊を指揮し、勇猛果敢に薩摩軍に挑（いど）み、一度も負けた事がなく、敵から無敗の鬼玄蕃（げんば）と恐れられた。



酒井 玄蕃

恭順後の玄蕃は、薩摩藩の庄内藩（現在の山形県鶴岡市）に対し、江戸の薩摩藩邸焼打ち（死傷者数十人を出す）の過去にもかかわらず、庄内藩に入る薩摩軍を丸腰で入場さすなど、寛大な措置に深い感銘を受け、それが西郷の命令であったことを黒田清隆より聞き及び、西郷と面会する。二人はお互いに人物として感

じ・認め合い・惚れ合い、やがて藩主「酒井忠篤」以下 70 名の薩摩留学生へと発展して行く。西郷は玄蕃と面会后、「鬼じゃのうて、がつついよかにせじやったが....」と部下に言ったと伝わっている。

注) よかにせ

鹿児島地方の方言。美男子。

本論に戻ろう。明治維新は日本に西洋なみの文明をもたらした。この文明化に対し、西洋の賢人の中には日本の西洋化に危惧する人達も居た。日本独自の優れた精神文化が侵されることを恐れたのだ。戦後、ヘレンミアーズは『アメリカの鏡、日本』の中で、自由・平等・正義を装いながら虚偽と支配と権力と言う暗黒の独裁者の道を歩む白人国家の文明なるものを、真の文明と誤解し、鏡の如く真似した日本について、当時のアメリカを痛烈に批判している、「本当の文明ではない....」と。

当時西郷は、西洋の刑法の如く一定の評価を下してはいたものの、西洋文明そのものについては、大きな警戒感を抱いていたようだ。『西郷においては「西洋文明」と「文明」は全く別の概念であること』を我々現代人は押さえておくべきである（先崎彰容氏から引用）。西郷の西洋文明理解について遺訓から学びたい。

### 「遺訓・第 17 条」

「正道を踏み国を以て斃（たお）るるの精神無くば、外国交際は全（まった）かる可からず。彼（か）の強大に畏縮し、円滑を主として、曲げて、彼の意に従順するときは、軽侮（けいぶ）を招き、好親却（かえ）って破れ、終（しまい）には彼の制を受くるに至らん」

#### （訳）

「国の為に、正しい道理を実践し、後は国と共に倒れてもよいという程の凜とした精神が無いと、外国との交際は、これを全うすることはできない。外国の巨大きさを恐れ、心が縮み、只、円滑に摩擦を起こさぬ事を主眼として自国の真意を曲げてまで、外国の言いなりになるようなら、侮（あなど）りを受け、親交は破れ、終いにはその国の干渉を受け、制圧されるに至るだろう」

「国を以て斃（たお）るるの精神」とは西郷の「天人合一思想」に基づく、国家の危機を“己”のものとして引き受ける気概が溢れている。「彼の制を受く

る」...は当時の植民地化の危機意識を感じる。当時、アヘン戦争が生々しく記憶に残る時代に西郷は生きていたのだ。西郷が語る西洋文明批判は、帝国主義批判と植民地主義批判であると言えるであろう。西郷は批判だけでなく、西郷が理想とする「文明」のイメージも「遺訓第 11 条」に述べられている。

「文明とは道の普（あまね）く行はるるを賛称せる言にして、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふに非（あら）ず、世人の唱ふる所、何か文明やら、何が野蛮やら些（ち）とも分からぬぞ。予、嘗（かつ）て或人（あるひと）と議論せしことあり、「西洋は野蛮じゃ」と云ひしかば、「否文明ぞ」と争う。「否な否な野蛮じゃ」と畳みかけしに「何とて夫（そ）れ程に申すにや」と推（お）せしゆゑ、「実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇懇説論して開明に導く可（べ）きに、左は無くして未開蒙昧（もうまい）の国に対する程むごく残忍の事を致し、己を利するは野蛮じゃ」と申せしかば、其の人、口を蒼（つば）めて言無かりきとて笑われける」

（訳）は簡単なので省略する。

「未開の国に対する程むごく残忍の事」とはまさしくアジアの国々が西洋の植民地主義政策によって呑み込まれて行く過程を意味している、にもかかわらず日本国内では外交の荒波が忘れられ、ともすれば西洋建築や衣装の華麗さ、斬新さに眼を奪われ、それを西洋文明だとすら思っている。

だが西郷にとって「文明」とは「道の普（あまね）く行はるる」ことを意味している。道とは、儒教の普遍的に世界で通用するもので、天によって与えられた使命を表す。植民地主義の西洋文明とは、普遍的でも慈悲でもない、即ち「文明」とは言えない...と。この様に西郷は「文明」というものを世界史的視野で観ていることに驚かされる。

戦後から今に至る迄、アメリカ文明を手放しで導入して、自らの国柄を失いつつある日本を、西郷はどう思うのだろうか？

令和元年（2019年）11月17日

志雲会代表 有馬正能